

## 遠藤周作「影に対して」論

——母への心理的屈折について——

川 鶴 隼 也

はじめに

遠藤周作文学におけるキーワードのひとつに〈母〉がある。これは江藤淳の評論『成熟と喪失——母の崩壊——』における『沈黙』評に端を発するもので、江藤はここで『沈黙』に描かれる神および宗教観の母性的性質を指摘し、さらにはこれが遠藤の個人的な母親体験に起因していることを推察した<sup>1</sup>。これに対して遠藤は、「作者が無意識のうちに持っているもの（中略）に刃を入れ、えぐり出し、それに言葉を与えた」と述べ、「私に感動と共に快感さえ与えた」と好意的な反応を示している。以来、遠藤は江藤の言説に便乗するようになり、〈母なるもの〉をはじめ、〈母なる神〉や〈母の宗教〉などの語を、エッセイや自己解題のなかで多用するようになる。遠藤が用いたこれらの語において、〈母〉という言葉には「様に、「ゆるす」や「つつみこむ」といったニュアンスが含まれている。

しかし、遠藤の実母・郁は、こうしたイメージとはかけ離れた人物であった。彼女は、東京音楽学校（現在の東京藝術大学）のヴァイオリン科を卒業した芸術家気質の女性で、結婚出産を経てもなおヴァイオリンに熱中するあまり、やがて離縁された。その後、姉の

影響でカトリックの信者となり、熱心に教会に通いつめては、布教活動にも尽力した。その烈しく厳しい姿は、遠藤の私小説的作品やエッセイのなかに認めることができる。

このような実母と〈母〉との間にあるイメージの齟齬は、研究者の間で周知されている点である。〈母なるもの〉の意味とその形成過程についての先行論は、「隠れキリシタン」の世界を媒介にした母像のイメージ形成を論じた笛木美佳の研究や、伝記的事実と照合しつつ遠藤の私小説的作品における父の描写の変遷に注目し、父という存在が絶対的な母像を創出する装置として機能していることを論じた下野孝文の研究など、いくつか確認できる。しかし、イコール遠藤と目される主人公の心理に主眼をおいたアプローチは、いまだ十分になされていないというのが現状である。そこで本稿では、精神分析の視座を導入して遠藤の私小説的作品を読解し、厳しく烈しかった母が優しいイメージを帯びるに至った、その過程を明らかにすることを試みる。

今回、分析対象とするのは「影に対して」である。この作品は、二〇二〇年に長崎市遠藤周作文学館の寄託資料より発見された生前未発表のもので、『三田文学』二〇二〇年夏季号に掲載された後、

同年十月に新潮社刊の短編集『影に対して―母をめぐる物語―』に収録された。一九六六年執筆と推定されている。この小説は、かつては小説家を目指していたものの、現在は妻子を養うために翻訳業に徹している勝呂有造を主人公に、「平凡が一番だ」と口癖のように言う安定志向の父と、ヴァイオリンに熱中するあまり離縁され、最期は孤独に死んでいった母との関係を、少年時代の回想を交えながら描いたものである。勝呂は、父の凡庸さを軽蔑し嫌悪する一方で、母の烈しさに苦しめられながらも彼女を思慕し続ける。母のように生きることを望みながらも、中年にさしかかった彼は、父のように安穏な生活に落ち着こうとしてしまう。こうした父母との関係と葛藤は、遠藤が作家人生のなかで繰り返し描いてきたものであると同時に、彼の実人生を強く想起させるものである。

原稿用紙への清書まで済んでいながら、「影に対して」が生前未発表であったその理由は定かではない。ただ、遠藤は一九六七年のエッセイ「母と私」のなかで「私はいつか母のことを小説に書いたかと思っているが、まだまだ私にはそれを書き分ける力がない」と述べている。このことから、「影に対して」はその内容がまだ小説として十分に昇華されておらず、遠藤の生の体験に近いものが現れていると考えられる。また、遠藤の創作史に照らしみると、「影に対して」を境に、母の描き方に変化があることが窺える。一九六六年以前に発表された遠藤の私小説的作品は、主に父に焦点が当たっており、登場したとしても母の存在感は希薄である。一方で、一九六六年より後の私小説的作品では、烈しく生きた母の姿が前面に押し出されるようになり、母が作品の中心的存在に据えられるようになっていく。こうした点を踏まえると、「影に対して」は遠藤

の母を主題にした作品の習作であり、母像を小説化する格闘期にある作品と位置づけられるだろう。したがって、主人公および遠藤の心理的屈折を追う上で、本作を分析するのは有効であると考ええる。なお、「影に対して」本文の引用は新潮文庫版『影に対して―母をめぐる物語―』（二〇二三年三月）に拠り、付される傍点はすべて引用者によるものである。

#### 一、母の記憶とイリュージョン

私はあなたが時折、作ってくれたホットケーキの味を憶えている。小学校から帰った時、あなたはそのホットケーキにドリコノをたっぷりかけて食べさせてくれた。（中略）ドリコノの味。あのキャラメルに似た味のする飲料は勝呂が子供の頃しかなかったものだ。（二三一―四頁）

勝呂は母との思い出をこのように回想する。これは、勝呂少年の入院を契機にヴァイオリンを辞めた母が「普通の母親」として振る舞っていた時期のものである。この引用部では、それが勝呂にとって甘い記憶であると同時に、もう取りもどすことのできない、ごく限定的な時間であるということをも、「勝呂が子供の頃しかなかった」「キャラメルに似た味のする」「ドリコノ」が象徴している。このような思い出が母に愛着を抱く材料として思い出されるのは当然であるが、勝呂は母にまつわる暗い記憶さえも心に浮かべては美化しながら思慕の念を深めている。次に引用するのは、帰宅した勝呂少年に目もくれず、母が一心不乱にヴァイオリンの練習をしている場

面である。

その母のきびしい顔を子供は怖ろしげに窺っていた。

「なにかくない」と彼は言った。「なにか果物ない?」

本当は果物などが欲しいのではなかった。ただ彼は、眼前の母の心をこちらに向けたかったのである。自分に話しかけてもらいたかったのである。

(中略)

「果物がないかって、聞いているんだけど……」

子供は母をゆさぶった。ヴァイオリンを弾いている間は決して話しかけたり、騒いだりしてはいけないと平生からきつく言われたのに、彼はその言いつけを忘れるほど不安にかられた。

「何するの」

母は怖ろしい顔で勝呂を睨みつけ叱りつけた。弓で廊下をさし、あつちに立っていないさいと言った。勝の下が真赤に色が変っている。ヴァイオリンを三時間もはさみつづけたために、皮膚が充血したのだ。

「言いつけを聞けないなら、雪の中に立ってらっしゃい」

(二八―二九頁)

この記憶を妻に話した勝呂は「そんな時のお袋はこわかった」と言う。しかし、そのような母に対して妻が「子供がお腹がすいているのに、叱りつけることができるなんて、あたしにはできないわ、とても」と非難するような態度を見せると、勝呂は「顔を強張らせ」、「自分以外の者が母を批判するのは許せない」と思うのである。

ただ、「妻の批判を勝呂は洪々、みとめざるをえない。(中略)母の場合、おそらく他人から見れば耐えがたい欠点とつづるものさえ、勝呂の心では美化されている」ともあり、母に対して盲目的だというわけでもない。

ここに見られる心理的屈折について、私は精神分析の理論を導入して考える。小此木啓吾は、母親に対する「イリュージョン(錯覚現象)」について次のように述べている。

子どもが心のなかでよい母親像を幻想します。そのよい母親像を満たしてくれる現実経験が、それと関連して部分的に与えられたとする。すると、子どもにとっては外的な存在としての母親がほんとうによい母親だという経験が確立するわけです。子どもにとって、母親とのすべての経験がそうでなくても、子どものなかの母親像と現実の母親が部分的に重なればほんとうによい母親だということになります。(中略)それは純粹な幻想でもなければ、純粹に客観的な経験から成り立っているものでもない。両方が重なり合っている一種のイリュージョンの像であるわけです。<sup>10)</sup>

つまり、母親体験の大部分がたとえ悪いものであっても、「理想の母親像」に適用体験がわずかでもあれば、子どもにとっては母親体験の全体が良いものに錯覚されうるのである。

これは勝呂と母の関係においても認められることができる。勝呂にとって「理想の母親」がどのようなものであるかは詳述されていないが、「普通の母親」という言葉はそれと同義に捉えることができ

るだろう。つまり、勝呂が母を「普通の母親」と表現していた時期は、まさに「よい母親像を満たしてくれる現実経験」にあたる。怖ろしい印象を与えることも多かった母だが、一時的な「普通の母親」体験によって勝呂のなかでは「イリュージョン」が起り、良き存在として認識されるようになったと考えられる。

こうした「イリュージョン」は一般的に対象への幻滅をきつかけに解消されるのだが、母と離れて暮らすようになったこと、そして現在は母が故人であることによって、勝呂はそうした機会を失っている。そのため、勝呂はいつまでも「イリュージョン」を通した母を胸に描くことになり、追慕を繰り返すうちに「イリュージョン」はより強固になる。こうして母の良い面は誇張されていき、現実から乖離した母像が勝呂のなかで生成されていくのである。

## 二、弱い父親

勝呂の父への感情は「自分の子供が、その父の手を握りしめているのが、勝呂には不愉快だった」という箇所に端的に表れている。しかし直後、このように感じてしまうのは「理不尽」である。勝呂は父に対する不快感を打ち消そうとする。それもそのはずで、「平凡が一番」と口癖のように言う勝呂の父は堅実な性格であり、一般的に悪と捉えうる要素を有していない。「父はいわゆる世間的には決して悪い夫ではない」とあるように、父の真つ当さについては勝呂も認めるところである。それにもかかわらず、勝呂が父を嫌悪しているのはなぜなのだろうか。

勝呂が父を嫌悪する原因としてまず考えられるのは、父が母と離

婚したことである。勝呂は父母の離婚を、父が母を「裏切った」というふうに見ている。つまり、父を悪役に布置しているのだ。「怒り」「憎しみ」「厭わしい」など、勝呂から父に向けられた嫌悪を示す言葉も、父母の離婚を境に用いられるようになっており、離婚が父を嫌悪する契機になったことは明らかである。ここから、勝呂の父に対する嫌悪は、父と勝呂の二者関係ではなく、母を含めた三者関係のなかで生じているということが指摘できる。「勝呂の心の中で、彼女の思い出が美化されれば美化されるだけ、彼には父にたいする軽蔑感」が生じることもあるように、勝呂の父に対する嫌悪は、母に対する愛着と相関がある。したがって、勝呂と母の関係を論じるにおいては、父に注目することもまた重要なのである。

さらに、勝呂が父を嫌悪する理由としてもうひとつ指摘できるのは、父が勝呂家のなかで権威として機能していないことである。次に引用するのは、例のごとく母が夢中でヴァイオリンの練習をしているときの父と勝呂少年のやりとりである。

庭に登音がした。外套の肩も、中折れ帽も白く雪にそまつた父だった。ヴァイオリンの音のする応接間の前までくると彼はたちどまったまま、しばらくじっと音のする方向を見つめていたが、そのまま背をまげて裏口にむかった。

「奥さん、よぶか」

「いや、いい。練習中なんだから……」

台所で満人の女中と父との会話が聞えてきた。廊下に入ってきた父は、ポケットに手を入れて、窓に顔を押しあてている勝呂にむかって、おや、と小さな声で言った。(中略)

「お母さんに会ったか」

「まだ。だって練習中は応接間に入ったら、いけないんでしよう」

父は黙って、勝呂の顔を見おろしていた。それから小さな声でたずねた。

「淋しくないか。お前」

「どうして」

勝呂はなぜ父が急にそんな質問をしたのかわからない。彼にはそれらの毎日が当り前のことのように思われたからである。父も、帯の中に両手を入れたまま、彼と肩を並べながら、凍み雪の上に降り続ける雪をぼんやりと見つめていた。

(三九—四〇頁)

この場面から、父も勝呂少年と同様に母から構われない存在であったことがわかるだろう。「背をまげて」「小さな声で」「ぼんやりと」など、弱々しく描写される父は、ヴァイオリンに夢中で家族に構わないでいる妻に対して、何もはたらきかけることをしない。「彼と肩を並べながら」という描写が象徴するように、父と勝呂少年は同じ位置にいる。弱くて寂しい少年と同列である父親が、権威として機能するはずはないのだ。

また、離婚に際して父母のどちらが勝呂少年を引き取るのかという問題において、父は学校のことや将来のことを楯にした外堀を埋めるような説得をしたり、勝呂少年の欲しがっていた本を買うことで気を惹こうとしたりしている。このような父親から権威というものは感じられず、勝呂少年は「父は卑怯だ」とさえ考える。最終的

に勝呂少年は父方についていくのだが、それを決定づけたのは父でなく伯母（父の姉）であった。家族の一大事において最終決定権を行使できない父は、一家の長たるには弱すぎる存在であったと言える。

三、「影に対して」に見るエディプスコンプレックスと阿闍世コンプレックス

親子関係に関する精神分析の理論でよく知られたものに、フロイトの提唱した「エディプスコンプレックス」がある。母親に愛着し、父親を敵視するエディプスコンプレックスの構図は、「影に対して」においても十分認められる。ただ、その克服・解消を作中に認めることはできない。

エディプスコンプレックスは通常、威厳ある父親が「去勢者」として、つまり母親のパートナーは父親である自分だと誇示するかたちで、母子の間に立ちはだかることで解消される。しかし既に述べたように、勝呂の父は弱い父親であり、そのため「去勢者」の役割を演じられない。それどころか、離婚というかたちで父は母のパートナーであることを放棄した。よって、勝呂は父親からの裁きや罰を受ける見込みがなく、母親に対する際限のない愛情が解放される状況になつていたのである。

このような場合、息子の母親に対する愛着は、父親を打ち負かして自分が母親のパートナーにとり代わろうとする方向へより強くはたらくとされる。小此木は「父親に負けないように自分を発揮し成長させて、結局父親のようになってしまふことで乗り越えるという

かたちを通して、父親以上になること」がエディブスコンプレックスの最も良い克服の仕方であると説く。しかし、「影に対して」同様に母を描いた「六日間の旅行」には「私だって一人の夫としては母のような女ととても生活できぬ」とあり、遠藤の私小説的作品に登場する息子は、母親に愛着しながらも、そのパートナーになることは拒否している。これは父親との競争の放棄とも言えるだろう。そのようななか、勝呂をはじめとする主人公たちは、姿形のみならず性向までもが父親のようになってしまっている。これは積極的な成長の結果ではなく、望まないかたちでの軽蔑対象への近接である。

このように、遠藤の私小説的作品に描かれるエディブスコンプレックスは、健全な道筋を辿れていない。その上で、「影に対して」のラストシーンにおいて勝呂は、「あなたなんか、お父さまぐらいにも、なれないんじゃないか」と妻に言われる。つまり、放棄したはずの競争で、軽蔑している父に敗北してしまうのである。このように、勝呂は大人になってもなおエディブスコンプレックスを克服することができず、混迷を極めているのである。

エディブスコンプレックスは父子関係を中心としたものだが、母子関係に焦点を当てたものに、古沢平作が提唱した「阿闍世コンプレックス」がある<sup>12</sup>。小此木らによる補訂を経て、阿闍世コンプレックスが辿るステップは次のようにまとめられている。①理想化された母親像との一体感を現実の母親に求める。②現実の母親は理想的な存在ではなく、場合によっては自分を見捨てかねないことに息子自身が気づき、その幻滅によって激しい怒りや恨みが生じる。③現実の母親が理想化された母親を演じ直し、恨んでいる息子をゆるし

て献身する（この母親からのアプローチを特に「とろかし」と呼ぶ）。④「とろかし」に遭遇し、息子の方でも母親を理解してゆるし、新たなかたちでの一体感を回復する<sup>13</sup>。

このようなプロセスは、「影に対して」の母子関係にも認められる。ヴァイオリンに打ち込むあまり、勝呂少年に構うことがなかった母は、自らの芸術のために子どもさえ見捨てかねない母親に当たる。こうした母に接し、勝呂少年は寂しさや怖ろしさを覚え、入院中に母が看病をしながらも隙あらはヴァイオリンの指使いを練習していたことで決定的な「幻滅」をする。しかし、勝呂少年の退院後、母は「普通の母親」として、息子に対して献身的に接するようになった。ここに「理想化された母親の演じ直し」があり、「とろかし」がある。しかし、このあと母は自殺未遂というかたちで「理想化された母親」を拒絶しており、阿闍世コンプレックスの克服は破綻している。

ただ、阿闍世コンプレックス克服の機会はまだ一度訪れる。父母の離婚後、離れて暮らす勝呂少年と母がなす手紙のやりとりにおいて、母の手紙からは息子への献身、すなわち「とろかし」とともに、息子からのゆるしを求める態度が窺えるのだ。これは、「母さんは他のものはあなたに与えることはできなかったけれど、普通の母親たちとちがって、自分の人生をあなたに与えることができるのだと——それを今はあなたにたいするおわびの気持と一緒に自分に言いきかせている」という文言に象徴される。しかし同時に、「テクニクだけの人生を生きるような人間にはならないでほしい」「アスハルトの道など歩くようなつまらぬ人生を送らないで下さい」など、息子にも自身のように生きることを望むような内容も手紙には書か

れていた。これらは勝呂少年にとって「とでもできないこと」であり、それはいつしか「重荷」となっていた。こうした母の手紙に對して、勝呂少年は嘘で繕った返事を書いたり、勉強に励まない、つまりは母の期待に応えなかつたりするというかたちで「とろかし」を拒絶する。今度は、勝呂少年の側から阿闍世コンプレックス克服の可能性を断つてしまうのである。芸術家として情熱的な期待をかける母は、勝呂が一体感を求めた母像ではなかつたのである。

母が亡くなってしまった現在、勝呂母子はゆるし合う、ということがもうできない。つまり、勝呂は母との一体感を回復する段階には至れないのである。こうして、母との関係は未解決の問題として、いまだに勝呂の胸に巣食っているのである。

#### 四、裏切りと自己正当化

エディプス・阿闍世の両コンプレックス未解消の他にも、勝呂が中年になつても母を問題にしななければならない要因に「裏切り」がある。

前述の「とろかし」の拒絶もまさに裏切りの一つとして捉えられるのだが、勝呂の最たる裏切りは父母の離婚および父の再婚に際してのもののだろう。父が再婚するという話を聞いたとき、勝呂少年は「自分が母を今、また裏切りつつあることを感じながら」、「いやだ」とも言わずに黙っていた。「責任の所在が何処にあるにせよ、結果的に自分が母を一步一步孤独にさせ、見棄てる生活に落ちていくのも事実だつた」と勝呂は述懐する。離婚という出来事において父を悪役に布置しながらも、勝呂は自身もそれに加担したのだとして、

母に對して罪悪感を抱いている。

さらに遡れば、母が「普通の母親」として振る舞っていた時期にも、勝呂の裏切りは潜在している。勝呂少年が「ただむしように嬉しかつた」と言い表しているこの時期、母はよく「日傘」を持った姿で描写されている。これはつまり、父や伯母も含め、勝呂少年らが母の「普通の母親」としての振る舞いに満足し、陽光に照らされるような心地でいる一方、日傘を差す母は一人だけ暗い影のなかにいたことを意味しているだろう。実際、この時期の母の表情はたびたび「哀しそう」と表現されている。これに加え、母の音楽学校時代の友人Sが勝呂家に泊まつたときの場面を引く。

「あなたがねえ……、こうなるとは思わなかつたわ」とSさんは、うつ伏せになり煙草に火をつけながら言った。「もう弾かないの」

「駄目よ。指がなまっちゃつて」  
「倅せなの」

充分、満足していると母は、はつきりと答えた。闇にうごく煙草の火口をみつめながら、勝呂は嬉しい気持でその返事を聞いていた。今、考えれば、あの母の返事は音楽学校時代の友人への対抗心から出たのだろうが、また小学五年生だつた彼には裏にある感情まで到底、みぬくことはできなかったのである。

(四八頁)

ここから、勝呂少年と母との間にある心境の相違は明白だろう。そして、この後に起こる母の自殺未遂でそれは決定的になる。以前

に増して母と近い距離で過ごすことができるようになったにもかかわらず、母の暗い心境には気づかず、自分だけが明るい心境でいたことが、勝呂の大きな裏切りと言えるのである。

こうした裏切りが母を孤独にしていたのだと、勝呂は罪悪感を抱く。この罪悪感を解消するために勝呂は、母を思慕し続け、自分だけが母の理解者なのだと思おうとする。そして、母の側に立つこと、つまり母のように芸術家的に生きることを望む。しかし、夫となり、父親となった勝呂は、安定を求めるあまり、芸術（小説）に情熱を注がなくなった。この現状が勝呂にまたしても罪悪感を抱かせる。

そうしたなか、翻訳した小説がヒットして俄かに懐が潤った勝呂は、妻子を連れて遊びに出かける。こうして「平凡」な幸福を享受した彼は、「こういう生活がなぜ悪いんだと急に考えた。なぜ今更、小説を書く必要があるんだ。俺はこうして結構やっているじゃないか。なぜこの結構な毎日を自分で恥ずかしがる必要があるんだ」と思う。ここに「平凡が一番」と言う父の価値観への歩み寄りが見られる。しかし直後、「残酷な悪戯のように勝呂の頭にあの母の死顔が浮かんで」くる。母は「平凡」な幸福を否定する、いわば呪いのような機能をもって勝呂のなかに存在していることが読み取れる。

このように、勝呂は父の側から脱し、母の側に立つことを強迫されている。しかし、すでに言及した「イリュージョン」や父への嫌悪と母への愛着の相関によって、勝呂のなかで母は理想化されすぎたままになっている。母を高めれば高めるほど、そこへの到達は困難になるのである、勝呂は父の側に留まらざるを得ない状況に陥っているのである。こうした状況において勝呂が救われるには、自身の弱

さや愚かさ、至らなさを母にゆるしてもらう他ないのではないだろうか。

こうした自己正当化とも言える勝呂の態度は、作中の随所に見られる彼の傾向である。例えば、母からの手紙を受けとつてもなお勉強に励まなかった場面では、「それは父にたいするかすかな復讐のためであり、成績をよくすることによって父を悦ばしたくはなかったから」と、自身の学力や気力の不足を、父への「復讐」という積極的な意味に転化させて、正当化しようとしている。さらに、最も根源的な点を指摘するならば、我々読者には、あまりに価値観の異なる勝呂の父母が恋愛結婚したことが大きな謎として意識されるのだが、勝呂は「母はなぜ、父と別れたのだろうか」という疑問を抱く。これはおそらく、父母の結婚を疑問視することは、二人の間にも生まれた勝呂自身の存在の否定に関わるからであろう。ただ、勝呂も一度だけ「母はなぜ、父と婚約などしたのだろう」と疑問を抱く。しかし、これを追究し始めると「母にたいする自分のイメージに何か翳がさすような気がして」すぐさま考えるをやめた。勝呂は自身の存在を正当化するため、さらには母のイメージを侵さないためにも、父母の結婚に切り込んでいくことはしないのである。

こうした自己正当化によって、母は「平凡」に疑問を呈す呪いのような存在であると同時に、「平凡」に安んじる勝呂を容赦する存在としても意識されるようになるのである。またこのように、母が両義的な存在であるがゆえに、勝呂は決着をつけることができず、今もなお母を胸に葛藤を続けているのだということも言えるのではないだろうか。

おわりに―母から〈母なるもの〉への転化―

ここまでの分析で明らかになったことは以下の通りである。「普通の母親」体験を契機に、厳しく烈しかった母が「イリュージョン」を通して理想化され、勝呂にとっては愛着の対象となった。また勝呂は、エディプス・阿闍世の両コンプレックスを克服できておらず、それゆえに母との関係を中年になってもなお問題にし続けている。その結果として、勝呂は母にゆるしを乞うようになり、自己正当化のためにゆるす存在としての母が意識されるようになった。このように、勝呂における母の像は、いくつかの心理的要因が重なり合った結果、歪みながら固着していったもので、実体としての母からは乖離している。つまり、勝呂が胸に浮かべ、ゆるしを乞うている対象は、母のようで母でない。いわば〈母なるもの〉なのである。作品タイトルとなっている「影に対して」の「影」が意味するところも、実体を離れたその似姿であるというふうにと読めるだろう。

遠藤がエッセイなどで「母」を形容詞的に用いるとき、想起されていたのはまさにこの〈母なるもの〉だったと考えられる。そうであるならば、強く厳しい母をもちながら、「母」という言葉を「ゆるす」や「つつみこむ」などの意で用いるに至った過程に対して、一定の説明を与えることができると思われる。

母から〈母なるもの〉への転化は、実体（個人・人間）としての母を離れて、より高い存在として捉え直すことである。このプロセスは「神格化」とも言える。このとき、山村賢明の言う日本の母親における宗教的な意味合いが増幅するだろう。山村は、「救済」を宗教の基本的機能と位置づけた上で、自己を犠牲にして家族に尽く

し、苦難に耐えながらも、無限に許すことで子の究極的な拠り所となる母親の典型的イメージが、観音菩薩と重なることを指摘している。加えて、日本の「隠れキリシタン」の間でマリア観音（聖母マリア崇拜）が広まったこととの関連にも言及している。遠藤は「沈黙」をはじめ、「隠れキリシタン」を多くの作品に描き、また、彼らに対する親近感をたびたび述べてもいる。ここに、遠藤における〈母〉と宗教の強い関わりが窺える。<sup>15</sup>

さらに遠藤は、母とイエスを同じように描いている。ヴァイオリンに生きた果て孤独に死んだ母と、愛に生きた果て無惨に処刑されたイエスは、ともに高さものを志したものの、結局は何も成しえなかった無力な者として捉えられている。その一方で、同時に「母は彼女の周りの人間を倅せにするか傷つけるか、した。少なくとも炎のようなもので、相手の人生の上の一つの痕跡を残した」（「六日間の旅行」）や「イエスが一度、その人生を横切った人間は、イエスのことをいつまでも忘れられなくなる」（「イエスの生涯」<sup>16</sup>）など、その存在や影響力の絶大さが語られもするのである。この描写の共通性から、母とイエスの部分的な同一視が読み取れる。また、まさに「母なるもの」と題した小説では、「平生、すぐに思いだす母のイメージは、烈しく生きる女の姿」であり、「哀しげなくたびれた眼で私を見た母は、ほとんど現実の記憶にはない」としながらも、ふとした折に母のイメージが、「母が昔、持っていた「哀しみの聖母」像の顔」に重なると書いてもいる。

以上より、母は、〈母なるもの〉へ高められた結果、イエスやマリアに近接する存在、延いては、遠藤における宗教的体系の核を担う存在にまでなっていると言うことができるだろう。このように、

〈母なるもの〉は、遠藤文学および遠藤の宗教観を語る上で不可欠の重大な要素であるということが、あらためて確認される。今後の課題としては、本稿で論じた心理的屈折を踏まえつつ、〈母なるもの〉が主要作品おいてどのような展開を見せ、遠藤独自の宗教的救済を構築しているのかについて検討していきたい。

1 江藤淳『成熟と喪失―母の崩壊―』（講談社、一九九三年十月）。

初出は『文芸』一九六六年八月―一九六七年三月）。

2 遠藤周作「解説 江藤氏と一つの作品」（『江藤淳著作集 2』講談社、一九六七年十月）。

3 笛木美佳「遠藤周作「母なるもの」論―「一つの秘密」が切りひらいた世界―」（『学苑』第八三一号、二〇一〇年一月）。

4 下野孝文「『哀歌』から「母なるもの」へ―描かれた父像を中心に―」（『遠藤周作とキリシタン―母なるもの』の探究―九州大学出版会、二〇二三年十一月。初出は『国語国文薩摩路』第五六号、二〇二二年三月）。

5 『E・TV特集「遠藤周作 封印された原稿」』（NHK、二〇二一年十月九日放送）にて、清書に使用されている原稿用紙や遠藤自身の日記などから、一九六六年に『沈黙』と並行して執筆された可能性を、山根道公が指摘している。

6 遠藤周作「母と私」（『母を語る』潮文社、一九六七年十月）。ちなみに、「影に対して」のなかにも、まさに「突っぱねて書く」ことができなかったために、勝呂が母を題材にした小説を断念したことが描かれてある。

7 下野も前掲論文にて同様の指摘をしている。ただ、同論文は「影に対して」発見以前のものであり、下野が境目として据えているのは「私のもの」（『群像』一九六三年八月）である。たしかに「私のもの」で母の存在感は強まっている。しかし、烈しく厳しい人物造形という点はまだ希薄であると筆者は見る。

8 遠藤周作「船を見に行こう」（『小説中央公論』一九六〇年十一月）や「童話」（『群像』一九六三年一月）、「帰郷」（『群像』一九六四年九月）など。

9 遠藤周作「六日間の旅行」（『群像』一九六八年一月）や「影法師」（『新潮』一九六八年一月）、「母なるもの」（『新潮』一九六九年一月）など。

10 小此木啓吾「シゾイド人間―内なる母子関係をさぐる―」（朝日出版社、一九八〇年五月）、八四頁。

11 小此木同書、一一三頁。

12 古沢平作「罪悪意識の二種―阿闍世コンプレックス―」（現代のエスプリ）一四八号、一九七九年十一月。初出は『精神分析研究』第一巻第四号、一九五四年四月。なお、本論は一九三三年七月にフロイトに提出されたものに基づくこととされる。

13 梶田叡一「日本人の阿闍世コンプレックス―小此木啓吾の考え」（梶田叡一・溝上慎一編『自己の心理学を学ぶ人のために』世界思想社、二〇二二年二月）参照。

14 山村賢明『日本人と母』（東洋館出版社、一九七一年三月）、二二〇―二二二頁。

15 「私は今日わずかに残っているマリア観音をみる時、このかくれ切支丹の、裏切者の、転び者のふかい哀しみをそこに感ぜざるを

えない。彼等がなぜマリア観音を必要としたかが私にも多少わかるからである。」（父の宗教・母の宗教―マリア観音について―）  
『文芸』一九六七年一月）など。

<sup>16</sup> 『波』一九六八年春季号から一九七三年六月号まで「聖書物語」の題で連載。一九七三年十月、『イエスの生涯』と改題されて新潮社より刊行。

#### 【付記】

本稿は、第五〇回山口大学人文学部国語国文学会研究発表会（二〇二五年五月十日）での口頭発表に基く。席上ご教示賜った方々に御礼申し上げます。

（かわつる・としや）